

# Café des open

## 三浦一族

### Menu 第24回

## 「円通寺跡」の 発掘調査

文／磯口健太郎（横須賀市教育委員会 生涯学習課）

今回は令和5年度に行われた「円通寺跡」の発掘調査の様子について紹介します。発掘調査は令和5年7月と、11月から12月にかけての2回行いました。この連載の令和5年12月号と令和6年の1月号でも紹介しましたが、大矢部弾庫跡の谷の最奥部に南北25㍍、東西35㍍ほどの平場があります。この平場は

谷底の平坦部から10㍍ほど急斜面を登ったところにあり、平場背後の斜面には深谷やぐら群が展開しています。この平場は三浦一族ゆかりの寺である円通寺の跡と考えられ、そこには寺とやぐらが一体となった中世寺院の空間が広がっています。

その円通寺跡と想定される平場に、トレンチと呼ぶ調査用の試掘坑を掘りました。60㍍ほど掘り下げると、整地や地盤改良のために行う「地業面(ちぎょうめん)」と呼ばれる、泥岩を敷き詰めた層が見つかりました。地業面は方位をほぼ東西南北に合わせて約10㍍四方に広がっているとみられます。狭い範囲の確認であり、柱を立てる礎

石などもまだ見つかっていないため確実なことは言えませんが、建物があったとすれば、縦横3間程度のもが想定されます。瓦は出土しないため、瓦葺きではなく茅葺きなどであったと考えられます。

また、調査では中世の土器類が見つかりました。

特に「かわらけ」と呼ばれる素焼きの小皿の欠片が多く見つかりました。清少納言は「枕草子」の「きよしと見ゆるもの」の中で「土器(かはらけ)」を清浄なもの例として挙げています。かわらけは一見すると粗末な器ですが、素焼きであるため液体などを注ぐと跡が残ってしまうことから、一回限りの使い捨ての器として政治的・宗教的な宴会や儀式など特

殊な場面で使われました。こうした性格から、多数のかわらけが円通寺跡で出土したことは、かつてこの土地に寺が存在した可能性を強く示すものともいえます。円通寺跡で出土したかわらけの製作年代は、概ね14世紀代と想定されるものが多くを占めています。一般にやぐらが作られるのは鎌倉時代の後半からと言われており、出土したかわらけの年代とも矛盾しません。

一方で円通寺は平安時代末の開基と伝わり、本尊であったとされる清雲寺の滝見観音は鎌倉時代前半に南宋からもたらされたと考えられています。しか

しながら、平安時代や鎌倉時代前半に遡る遺物は見つかっていません。また、円通寺自体は江戸時代まで存続していたにも関わらず、近世の遺物が出土しないのも不思議です。円通寺跡と深谷やぐら群はまだ謎が多い遺跡と言えるでしょう。



ドローンによる調査区写真



円通寺跡出土のかわらけ